

塩の国

—瀬戸内海のめぐみ、赤穂の塩—



塩の国（兵庫県立赤穂海浜公園内）



伊和都比売神社



旧日本専売公社赤穂支局

■ストーリー

塩田による製塩は、雨が少なく日照時間の長い温暖な気候が適しており、瀬戸内海沿岸では、江戸時代に「十州塩田」と呼ばれるほど、塩の一大生産地となりました。

なかでも赤穂は、弥生時代以来の製塩の歴史を持ち、古代には東大寺の塩荘園があったほか、江戸時代には「赤穂式」と呼ばれた入浜塩田を全国に広め、大坂では専売制を敷くなどしました。製塩は現在も続けられており、長い歴史に裏付けられた「赤穂の塩」は今も有名です。

市内には、当時の水路（水尾）や堤防、製塩用具（国指定文化財）、旧日本専売公社赤穂支局（県指定文化財）などが今も残されているほか、県立赤穂海浜公園内には江戸時代から近代にかけての塩田が復元され、当時の製塩を間近に体感することができます。

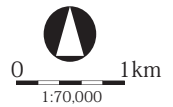
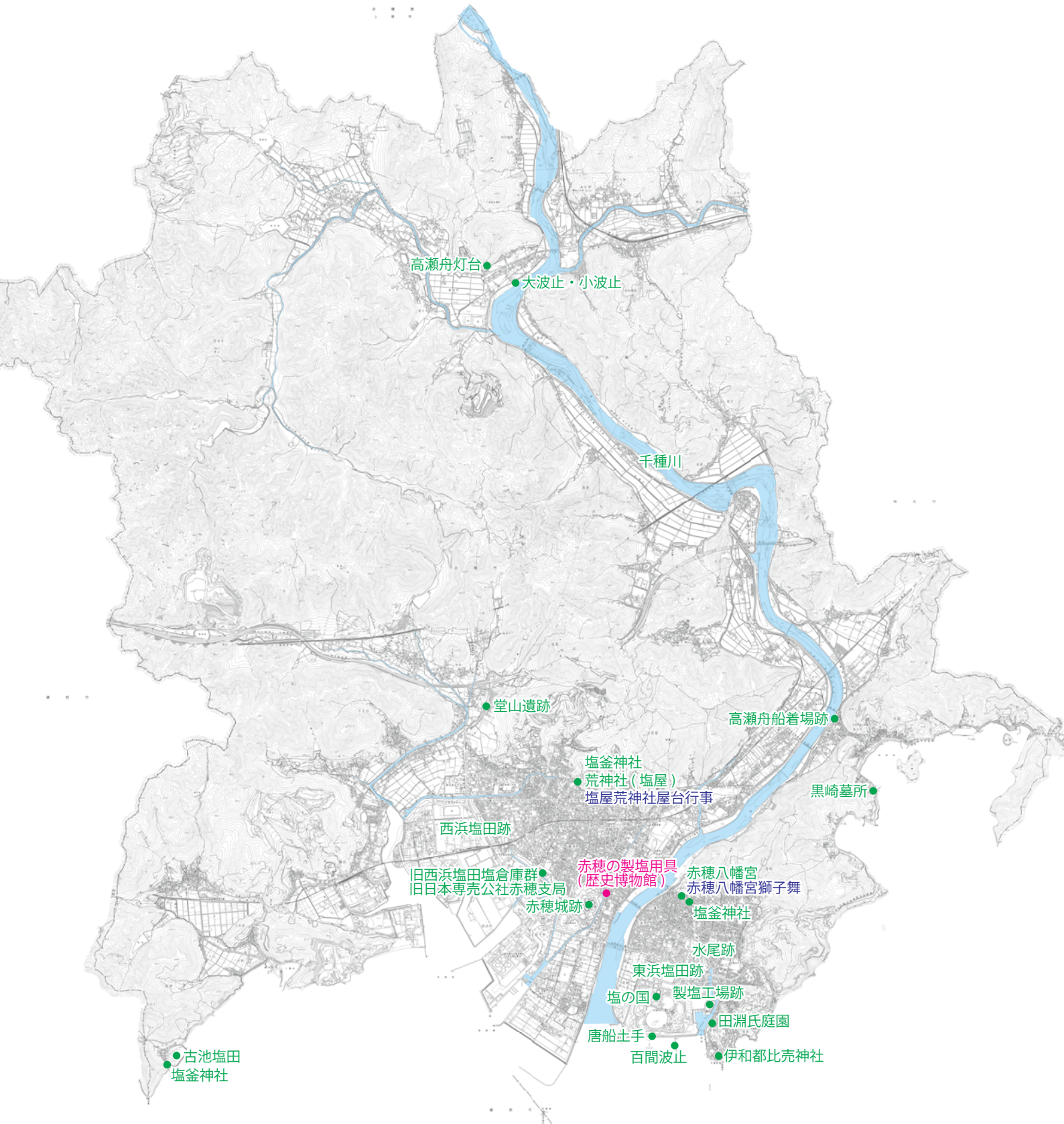
「西国名所之内 赤穂千軒塩屋」

歌川貞秀

東浜塩田の景観を描いた錦絵。塩田外縁の石垣の堤防、釜屋、沼井などを詳細に描く。赤穂城も描かれている。



□主な歴史文化遺産の分布



凡例	●もの	●場	●こと
----	-----	----	-----

赤穂の塩物語。

古代・中世

赤穂市塩屋にある堂山遺跡の発掘調査では、弥生時代末期の製塩土器が多数出土したほか、平安時代の塩田遺構が全国で初めて見つかり、この地が瀬戸内海の気候と地形を生かした歴史ある製塩地であることを明らかにしました。

平安時代には「石塩生荘」が東大寺の荘園となりますが、当時「坂越郷」と呼ばれた千種川河口部はまだ陸地化が進んでおらず、小規模なものだったようです。

中世になって河口部の陸地化が進行すると、洪水砂がもたらした肥沃な大地を求めて、山麓からの人々の移住が始まります。漁港としての機能も芽生え、中庄（現在の中広）に寺院や人々が集住するとともに、現市街地の場所に砦（加里屋古城）が築かれ、東の姫路方面、西の備前方面への街道が整備されました。

近世

江戸時代になって播磨に入った池田家は、瀬戸内海沿岸で積極的な製塩を行い、姫路や高砂などで塩田が開かれました。

赤穂での製塩開始時期は明確ではありませんが、寛永3（1626）年に入浜塩田開拓の伝承が残されているほか、1630～40年代の古絵図には、すでに西浜に塩田が描かれていることから、やはり池田家が積極的に製塩事業を推し進めていたことがわかります。

製塩が本格化するのは、正保2（1645）年、赤穂に53,500石で入封した浅野長直の時代です。翌年には姫路などからの移住が始まり、三崎新浜村をつくって、本格的な入浜塩田である東浜塩田を拡充させました。浅野家は、塩田によって得られた莫大な利益によって、城や城下町を拡大整備したといわれています。

江戸城松の廊下で起きた赤穂事件からしばらくして、森家が20,000石で赤穂を治めることになりました。森家時代には、塩田の開発資本の主体が在地商人や地主へと移ったことから、坂越奥藤家や御崎田淵家、塩屋柴原家といった豪商が塩田地主になり、廻船によって塩を全国に運ぶなどして莫大な利益を得ました。

近代

明治維新後は東浜、西浜のそれぞれで塩業組合が組織されましたが、輸入塩からの保護、国内塩業の育成や財政収入の確保などのため、政府による専売制が敷かれました。

生産方法は、かつての入浜から流下式、そしてイオン交換膜式へと変遷し、現在も、赤穂では塩が生産されています。

土器製塩

汲潮式

古式入浜式

入浜式

流下式

イオン交換膜式

製塩法の多様化

弥生時代末期
(200年頃)

天平勝宝8年
(756年)

慶長～元和頃
(1596～1624年)

寛永3年
(1626年)

正保3年
(1646年)

寛文7年
(1667年)

寛文12年
(1672年)

延宝5年
(1677年)

元禄14年
(1701年)

文化6年
(1809年)

文化9年
(1812年)

文政4年
(1821年)

明治初期
(1867年頃)

明治22年
(1889年)

明治25年
(1892年)

明治38年
(1905年)

明治43年
(1911年)

大正13年
(1924年)

昭和13年
(1938年)

昭和24年
(1949年)

昭和26年
(1951年)

昭和33年
(1958年)

昭和35年
(1960年)

昭和41年
(1966年)

昭和43年
(1968年)

昭和44年
(1969年)

昭和44年
(1969年)

昭和46年
(1971年)

昭和47年
(1972年)

昭和48年
(1973年)

昭和48年
(1973年)

平成9年
(1997年)

平成14年
(2002年)

平成16年
(2004年)

塩屋堂山で土器製塩
(堂山遺跡の発掘調査)

「石塩生荘」が東大寺の荘園となる
塩山60町歩、塩浜50町9反172歩

古式入浜の成立形態が成立
千種川デルタに100町歩ほど存在

池田光政の家臣 岡田弥兵衛が
尾崎浜に入浜塩田の開拓を開始

姫路などから塩田労働者の
移住始まる

唐船大土手築造される

三崎新浜村の成立

田淵家、新浜村塩問屋の営業開始

浅野長矩の吉良義典刃傷事件起きる
(赤穂事件)

赤穂藩、大坂での塩専売本格化

生産過剰に伴う塩田不況により
休浜同盟に参加

赤穂藩 大坂塩専売法を廃止

政府の自由市場公認政策により
塩市場混乱

赤穂製塩同業組合の結成
(産塩の販売、石炭等の共同購入)

千種川大洪水により、東浜塩田が
壊滅的被害

塩専売法施行、赤穂塩務局が
設置される

赤穂西浜塩業組合設立

赤穂東浜信用購買利用販売組合設立

東浜合同煎熬工場が完成

専売局から日本専売公社発足

赤穂町、坂越町、高雄村が
合併し赤穂市となる

流下式塩田への転換工事です

西浜塩業組合解散、赤穂海水工業(株)設立

タテホ化学工業(株)創立
(西浜塩業組合の化成部)

赤穂塩業資料館建設

赤穂西浜塩田において
イオン交換膜製塩に全面転換

「赤穂の製塩用具」が国の
重要有形民俗文化財に指定

赤穂東浜塩業組合(旧赤穂東浜信用購買
利用販売組合)が塩田での製造を停止

赤穂東浜塩業組合が解散
赤穂化成(株)設立

赤穂海水化学工業(株)(旧赤穂西浜塩業組合)
特例塩(赤穂塩特級)の製造開始

赤穂化成(株)、特殊用塩
(赤穂の天塩)の製造開始

塩専売法廃止
塩事業法施行

塩製造、販売とも
一部を除き自由化

赤穂海水(株)(旧赤穂西浜塩業組合)
(株)日本海水に社名変更

塩を、つくる。

赤穂での塩の生産は、土器を利用した土器製塩から、海水の干満を利用して水汲みの労力を減らす汲潮浜（堂山遺跡）、さらに合理化された古式入浜、さらに水尾をめぐらす大規模な入浜塩田へと変遷しました。

特に入浜塩田では、年間の晴れる日数、日照時間に加え、遠浅の地形や、海の干満差が1m以上ある地域が最適とされており、赤穂は、そのすべてを満たしていました。

江戸時代には瀬戸内海沿いの地域で全国の8割以上の塩生産を担うほどに成長し、「十州塩田」と呼ばれるまでになりました。



塩づくりの変遷（赤穂市立歴史博物館模型より）



古式汲潮浜
古代から中世。干満差の大きい地域にのみ築かれた。



古式入浜
中世～近世。入浜塩田の原初的な形態。



入浜塩田
大規模に張り巡らされた水尾（水路）と塩田地盤によって合理化された。

体感できる製塩関連施設



塩の国の復元塩田

兵庫県立海浜公園内にあり揚浜塩田、入浜塩田、流下式塩田が復元されている。隣接する水尾は当時の遺構であり、流下式塩田では今も製塩が続けられている。



百間波止 海水の取水口でもある水尾に千種川の運ぶ土砂が入らないように築かれた。



古池塩田跡

江戸時代に入浜塩田として開発された塩田で、後に流下式となって廃止されて以後、残されたままとっている。



水尾跡 塩田への海水の取水口であると同時に、上荷舟の通る水路でもあった。

塩を、運ぶ。



塩をつくるには、濃縮した塩水（かん水）を煮詰める作業が必要となり、莫大な量の薪が必要でしたが、これらは高瀬舟によって千種川上流部より薪が運ばれました。上流部にあたる有年地区には、高瀬舟の船着き場である大波止・小波止だけでなく、大変珍しい灯台が残されています。

東浜、西浜塩田でつくられた塩は、塩田に張り巡らされた水尾（水路）のなかを上荷舟が行き来し塩倉庫に運ばれました。西浜塩田の塩倉庫や水尾は現在も残されており、隣接する赤穂市立民俗資料館は、明治41（1908）年につくられた旧日本専売公社赤穂支局の建物群を利用したものです。



旧日本専売公社赤穂支局
兵庫県指定建造物。現在は赤穂市立民俗資料館となっている。



旧日本専売公社塩倉庫群
現在も塩倉庫として使用されている。（撮影：出水伯明）



黒崎墓所
坂越浦で客死した全国の水夫たちの墓。県指定史跡。

赤穂流塩田の広がり

赤穂で完成された入浜塩田は、江戸時代に全国各地にその技法が伝わりました。



赤穂の製塩法の広がり



高瀬舟灯台
塩などを運ぶ高瀬舟のためにつくられた、珍しい川の灯台。

赤穂ブランド第1号!?

文化6（1809）年、赤穂藩は大坂への塩専売を本格的に開始しました。藩は領内の塩販売の取り締まりを行い、藩の大坂蔵屋敷に送って落札を行うことで、塩取引の主導権を赤穂側に取り戻すことができました。

しかし一方、他国の船は赤穂塩を購入できなくなり、他所で買入れた塩を赤穂塩と称して販売したり、偽赤穂塩を作る塩田も現れました。赤穂塩の評価が高かった証拠です。

塩づくりが、はぐくんだもの。

赤穂の主産業は常に塩であり、赤穂の歴史の多くが塩業と関係しています。

廻船業

天然の良港であった坂越浦は、廻船業で栄えました。

江戸時代後期になって、北陸を中心とする北前船の活躍が目覚ましくなっても、坂越の廻船は赤穂の塩を運ぶ塩廻船として生き残りました。



塩廻船模型

赤穂市立歴史博物館に展示されている3分の1の模型。故・湊隆司氏（市選定保存技術保持者）による。

赤穂緞通の生産

児島なかという女性によって嘉永2（1849）年試作開始、明治7（1874）年より営業生産された赤穂緞通は、明治20（1887）年に御崎に伝えられました。

男性による塩田労働だけでは収入が少ないため女性が多数働き、御崎を一大生産地にしました。



赤穂緞通（県伝統的工芸品）
独特の「摘み方」で生まれるくっきりとした文様が特徴。

まつり

江戸時代以来、赤穂には塩屋村（西浜塩田）及び尾崎村、三崎新浜村（東浜塩田）という塩業従事者の村があり、西浜に塩屋荒神社が、東浜に赤穂南部全域を氏子とする赤穂八幡宮がそれぞれ鎮座し、氏子を抱えていました。

この2社では、かつての塩業従事者の「心意気」を見せる盛大なまつりが残されており、両者とも指定文化財となっています。



塩屋荒神社屋台行事

江戸期より塩屋村の鎮守であった塩屋荒神社の秋祭り。東西2つの大屋台を含めた総数9台の屋台練りが繰り広げられる。市指定。



赤穂八幡宮獅子舞

赤穂城下町を含めて赤穂の鎮守であった赤穂八幡宮の秋祭り。2人の勇壮な鼻高が見もので稚児頭人行列（市指定）も残る。獅子舞は県指定。

豪商と文化

「西の柴原、東の田淵」と言われた両家のほか、坂越の奥藤家も隆盛を誇り、田淵家、奥藤家は現在も受け継がれています。



田淵氏庭園（国名勝）

化学薬品業

近代になると、塩生産の副産物である「にがり」から得られる塩化マグネシウムや炭酸マグネシウムといった化学物質に着目した企業が、赤穂に工場を設立します。

木村製薬所が明治43（1910）年、塩野義製薬が大正6（1917）年に工場を設立し、赤穂東浜塩業組合は昭和22（1947）年、赤穂西浜塩業組合は昭和23（1948）年に化成部門へ進出しました。これらの企業は、現在も名前を変え存続しています。

歴史資料からみる赤穂塩田



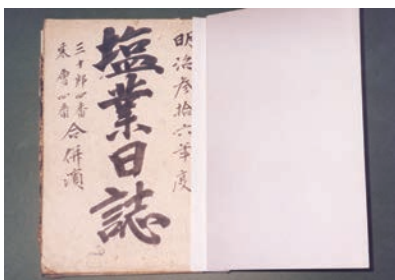
元禄期頃の塩田（元赤穂縣管轄絵図面<城下図> 東京大学史料編纂所蔵）

緑色の堤防に囲まれた部分が塩浜を示している。赤穂城をはさんで西浜、東浜に分かれていた。



船賃銀定法（個人蔵）

元文 4（1739）年における坂越から全国各地への船賃を示したもの。市指定。



赤穂東浜信用購買利用組合文書
近代の東浜塩田関係文書。市指定。



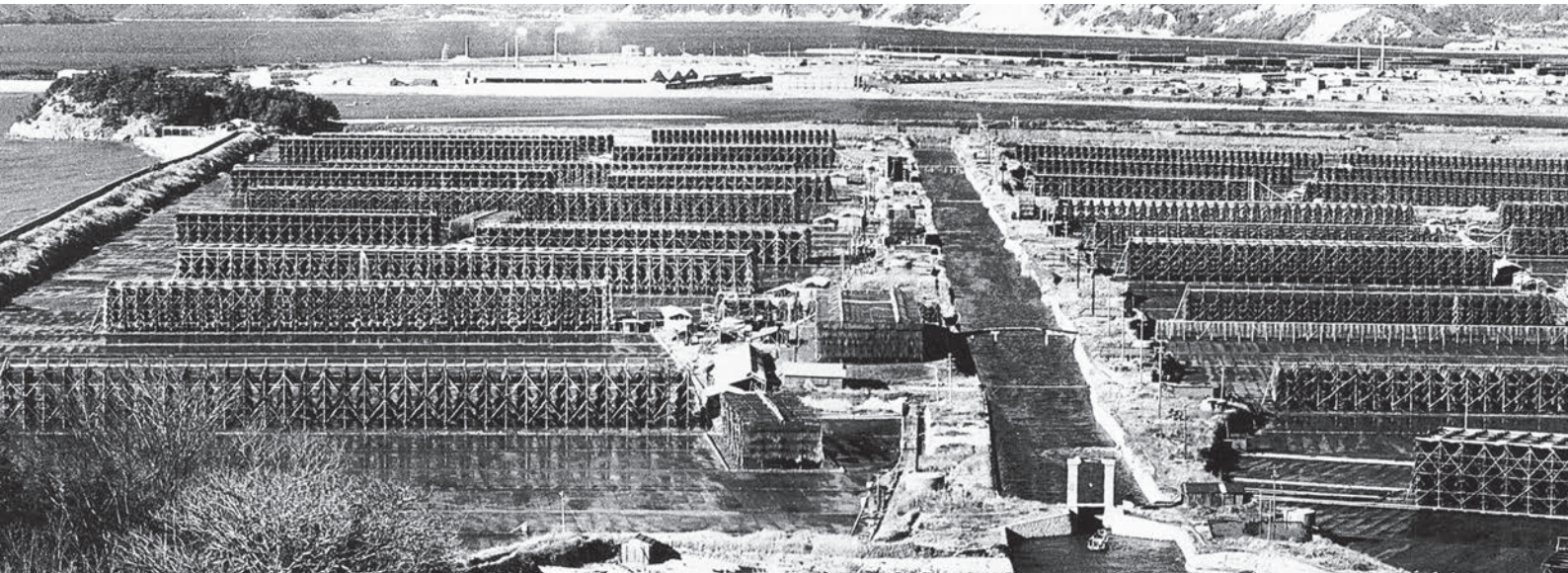
赤穂の製塩用具

かつて入浜塩田で使用されていた製塩用具。国指定重要有形民俗文化財。



枝条架の広がる西浜塩田（株式会社日本海水旧蔵）

昭和 30～40（1955～1965）年代の西浜塩田。かつての入浜塩田を改良し、効率的な方法として枝条架を用いた流下式塩田が採用されたが、昭和 44（1970）年にはイオン交換膜法に転換したため、塩田は不要となった。



東浜塩田の枝条架（個人蔵）

昭和 30～40（1955～1965）年代の東浜塩田。水路（水尾）に隔てられた区画（塚）それぞれに枝条架が並んでいる。右奥には西浜塩田も見える。

赤穂の塩のこれから

江戸時代に営まれた東浜、西浜塩田は、近代に赤穂東浜塩業組合、赤穂西浜塩業組合となり、現在はそれぞれの系譜をひく民間の塩メーカーとなっていますが、その歴史的経緯は大きく異なるものでした。

昭和 46（1971）年、塩専売制度下で第 4 次塩業整備事業が行われ、海洋の環境変化や塩価格低減への対応のため、塩田製塩を廃止し、イオン交換膜製塩に転換されることになりました。

このとき解散した赤穂東浜塩業組合は、化成品部門を母体として会社を設立し、塩田製塩の塩に近い、天日塩に「にがり」を加えた「特殊製法塩」の生産認可を受け、製塩を続けることで、東浜塩田の命脈を保ちます。

一方、専売制下でイオン交換膜法による製塩を続けた西浜塩業組合は、化学的に純度の高い塩の生産を行うようになりました。

平成 9（1997）年には塩専売法が廃止され、塩の製造販売が自由化されましたが、現在も赤穂では、国内の塩生産の約 2 割を生産し、また「特殊製法塩」の代表企業も営まれています。赤穂は、今も「塩の国」なのです。

また、塩だけではなく、塩の生産過程で生まれる「にがり」や、塩の性質を利用した、様々な活用が行われています。

赤穂弁

塩業に従事した浜男たちの方言は、少し荒い口調が特徴の播州弁の中でも、特に激しいものでした。

ベッコヨナイ	オーケーヨ
オッテダスカー	〇〇シテッカーレ
オマハンラ	ナニションナイヤ
デーナンネー	ドナイガイキョンナー
ドエレエ	ケーナモン



西浜塩田図

明治 6（1873）年のもの。
（赤穂市立歴史博物館所蔵）